

「我が国の伝統や文化に関する教育の充実に係る調査研究」 完了報告書【推進地域：国立大学法人京都教育大学】

1. 現状と課題

グローバル化が急速に進んでいく社会の中で、子供達は、多様な人々や文化と出会い、さらに協働して新たな価値を生み出していくことが求められていくことだろう。伝統文化を学ぶことは、多様な文化を理解していくための土台となるものであり、伝統文化教育は、多様な文化理解への基盤をつくることを目指すものである。

これまで、京都教育大学附属桃山小学校（以下「本校」という。）では、伝統音楽や郷土の音楽を大切にした教育活動を行ってきた。京都教育大学（以下「本学」という。）では、これをさらに充実、発展させるため、平成 27 年度から、文部科学省「我が国の伝統や文化に関する教育の充実に係る調査研究」事業を委託され、本学や本学附属桃山小学校・附属桃山中学校とともに、伝統音楽の伝承者（保存会）や専門家と連携を図りながら、伝統音楽を教材とした授業開発を行い、音楽科の教育課程の中に伝統音楽の学びを位置付けて、伝統や文化に関する教育の充実に努めてきた。

平成 28 年度から、本校の開発した伝統音楽を教材とする授業を広めるために、京都府公立小学校 1 校及び京都市公立学校 1 校との連携を図り、伝統音楽の授業実践や教員研修に取り組んできた。これにより、伝統音楽に関連した題材を使った授業に取り組む京都府・京都市の公立学校が増えてきた。また、箏の伝承者と協力し、教員が主体となって伝統音楽の授業に取り組めるような内容の DVD「箏を活用した授業づくりのために～生田流箏～」を開発した。

さらに、平成 29 年度及び 30 年度は、伝統音楽教育の普及を目指して、地域の学校教員や教員志望の学生を対象とした伝統音楽教育ワークショップや、研修会を複数回開催した。このワークショップは、伝統音楽の専門家等による体験と、それらを教材化した授業の模擬授業との構成で提案するものであった。また、和楽器が校内に十分に整備されていない学校でも取り組めるように、和楽器を使わない授業も開発し、教育実践研究発表会で提案した。

学校教育における伝統や文化に関する教育への教員の理解と必要性の高まりと共に、実践を試みようとする教員は増えてきている。しかし、指導する際、教員自身が、箏や和太鼓などの経験や伝統音楽に関する知識がなく、その実践をためらってしまう現状が見られる。本研究では、平成 28 年度に開発した指導者のための箏の DVD の普及に努めてきたこともあり、実践をするに当たり事前に教材研究として活用したり、あるいは研究会の資料として活用したりという報告があった。箏が学校にはない場合にも、また教員が箏の演奏経験がない場合でも、DVD のような動画コンテンツがあることで、伝統音楽の実践につながっている現状が明らかになってきた。もちろん、動画サイトなどに公開されている伝統音楽の動画等の活用は考えられるが、それらは教育用に作成・公開されたものではないため、教師の教材研究にはなっても、授業においてはなかなか活用できない場合もある。また、

児童・生徒にとって必要な情報が手に入らないという声も多く聞く。このように、教員が授業や研修に活用できるような伝統音楽に関するデジタルコンテンツや教材資料の開発，そしてその普及が求められている。

2. 実施内容

(1) 計画の概要

本年度は、「子供の創造性を育む伝統・文化教育―誰もが取り組める伝統音楽の授業実践の充実を目指して―」と研究テーマを定め，誰もが取り組める伝統音楽の授業実践の充実を目指して研究に取り組んできた。伝統音楽の専門家と協働しながら，本校がこれまで開発してきた伝統音楽教育プログラムに基づく教材やデジタルコンテンツを作成した。そして，それらのコンテンツを京都教育大学公式 YouTube kyokyochannel に掲載し，その実践事例をプログラム案として京都府・市の公立小学校・中学校に配布して，教師が授業や研修などで活用できるようにした。

実践校においては，伝統音楽の系統性に注目し，よりよい授業実践を目指した。この中で，和楽器等を使用しない授業実践についてもさらに開発を進めた。さらに，京都府の公立小学校と連携し，協力校の実態に応じて伝統音楽の授業実践を行い，公立小学校への普及を目指した。

(2) 具体的な実施内容

類型Ⅰ	類型Ⅱ	類型Ⅲ
○	○	

【具体的内容について】

本研究では，本校と本学の音楽科や教職キャリア高度化センターの大学教員が協働して，本校がこれまで開発してきた伝統音楽教育プログラムに基づくデジタルコンテンツを作成し，教師が授業や研修などで活用できるようにした。また，本校と本学の音楽科の大学教員及び附属桃山中学校の教員が協働して，伝統音楽の系統性について着目しながら授業開発を行った。

第一に，伝統音楽の専門家と協働して，教員が授業で使いやすいデジタルコンテンツや音源データを計 50 コンテンツ作成した。

第二，伝統音楽の系統性に着目し，伝統音楽の学習内容について整理を行った。また，和楽器がない等，伝統音楽教育の環境が揃わない学校でも実践できるように，特に鑑賞領域の授業やわらべうたを活用した授業を充実させた。

第三，京都府の公立小学校と連携し，協力校の実態に応じて伝統音楽の授業実践を行い，その普及を目指した。さらに，教員を対象としたワークショップを行い，授業実践の充実を目指した。

(3) 成果物の概要

①箏（2018年度分をデジタル化）、わらべうた、和太鼓に関するデジタルコンテンツを作成し、京都教育大学公式YouTube kyokyochannel に掲載した。（文部科学省への提出用及び記録用としてわらべうた、和太鼓に関するデジタルコンテンツのDVD20枚を作成した。）

②わらべうた、和太鼓の実践事例を掲載した研究報告書を作成し、全国の国立大学法人の附属小学校及び京都府・市の小中学校に配布した。また、実践事例のプログラム案にはデジタルコンテンツの活用場面にQRコードを掲載し、プログラム案と照らし合わせながら動画を見られるようにした。

(4) 成果の検証

①伝統・文化教育推進委員会で授業を提案することで、学校教育の観点から、また伝統音楽の専門的な見地から意見を交流することができた。例えば、音楽の教科書2社ともに掲載されている《春の海》について研究授業を通して、学校関係者からはこれまでの授業実践と比較しながら、また伝統音楽の専門家からは演奏家としての視点から、様々な意見を交流することができた。協議を通して、《春の海》の文化的価値を改めて確認し、教材的価値を一層高めることができた。

②わらべうた、箏、世界の音楽に関するワークショップを行った。参加者のアンケートから、研修の「分かりやすさ」や「満足度」が高かった。「実際に自分が経験することで、より理解を深めることができた。」「遊びや模擬授業で体験したことと、理論の両面があり分かりやすかった。」など自身の学びを深められたこと、そして「子供たちの授業に、今後活用できる内容だった。」と言った感想が寄せられ、ニーズに応じた内容であったことが満足度の高さへとつながったと考える。さらにワークショップの参加者から、実際の授業実践へつながっていったとの報告を受けている。

③これまで開発してきた伝統音楽を教材とした授業プログラム案を基にしてデジタルコンテンツを作成し、京都教育大学公式YouTubeに公開した。これらに対応した実践事例集を全国の国立大学法人の附属小学校や京都府・市の公立小学校・中学校に配布することで、より広く多くの教員に活用されることが期待される。

(5) 実施スケジュール

7月30日 第1回 伝統・文化教育推進委員会（経費は自己負担）

10月9日 第2回 伝統・文化教育推進委員会

研究授業 第1学年「はねるリズムを意識して《まるたけえびす》を歌おう」

10月24日 ワークショップ①「わらべうたの音楽の授業」

11月14日 ワークショップ②「箏の音楽の授業」

11月21日 京都府小学校教育研究会 音楽科教育研究大会において伝統音楽の授業公開（於：京都府城陽市立久世小学校）

第1学年「拍を意識して《おちゃらかほい》を歌おう」

	第2学年「リズムパターンを意識して和太鼓の音楽をつくろう」
12月12日	ワークショップ③「世界の音楽の授業」
2月12日	第3回 伝統・文化教育推進委員会
	研究授業 第6学年「音色を意識して《春の海》を味わおう」
2月	デジタルコンテンツを公開
3月	実践事例集の配布

(6) その他実施に当たって特筆すべき事項

--

3. 実施体制

<p>本学の教員と、京都府や京都市教育委員会の指導主事及び伝統音楽の専門家による伝統・文化教育推進委員会を中心に研究を進めた。</p>					
<p>伝統・文化教育推進委員会</p>					
京都教育大学副学長（附属学校担当）兼附属学校部長				中	比呂志
京都教育大学教育学部教授（音楽科）				清村	百合子
京都教育大学教職キャリア高度化センター教授				西井	薫
京都教育大学附属桃山小学校	校長	香川	貴志	教諭	兒玉 裕司
	副校長	原田	勝之	主幹教諭	桑名 良幸
	教諭	北村	慎朗	教諭	高橋 詩穂
	教諭	井上	美鈴	教諭	福永 愛美
京都教育大学附属桃山中学校	教諭	野上	華子		
京都府教育委員会学校教育課指導主事				村上	裕子
京都市総合教育センター指導室主任指導主事				日比野	晶子
箏・柳川三味線演奏家（京都教育大学非常勤講師）				林	美恵子
箏・柳川三味線演奏家（奈良教育大学非常勤講師）				林	美音子
南観音山囃子方会 祇園囃子伝承者		鈴木	昌和		
中堂寺六斎会 芸能六斎伝承者		橋本	雅文		
中堂寺六斎会 芸能六斎伝承者		塩見	昌也		
民俗音楽学会員		藤田	加代		

4. 今後に向けて

今年度は、箏、わらべうた、和太鼓のデジタルコンテンツを作成した。これらのコンテンツ全てに対応した実践プログラム集を作成することで、より活用されることが期待される。また、小学校・中学校の連携を意識しながら伝統音楽の系統性を整理することで、児童・生徒の伝統音楽の学びをさらに充実させたい。

また、来年度は京都で受け継がれてきた「祇園囃子」や「芸能六斎」に関するコンテンツを作成することで、地域に根差した芸能を教材とする授業実践の充実を目指したい。なお、今年度もわらべうたに関するデジタルコンテンツを作成したが、来年度はさらに他のわらべうたも取り扱いたいと考えている。

「我が国の伝統や文化に関する教育の充実に係る調査研究」 完了報告書【実践校】

1. 実践校について（2019年4月1日現在）

学校名	京都教育大学附属桃山小学校（きょうときょういくだいがくふぞくももやましょうがっこう）							
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	12	22
生徒数	68	69	69	70	72	72	420	
学校のホームページアドレス	http://www.kyokyo-u.ac.jp/MOMOSYO/							

2. 現状と課題

グローバル化が急速に進んでいく社会の中で、子供達は、多様な人々や文化と出会い、さらに協働して新たな価値を生み出していくことが求められていくことだろう。伝統文化を学ぶことは、多様な文化を理解していくための土台となるものであり、伝統文化教育は、多様な文化理解への基盤をつくることを目指すものである。

これまで、京都教育大学附属桃山小学校（以下「本校」という。）では、伝統音楽や郷土の音楽を大切にしていた教育活動を行ってきた。京都教育大学（以下「本学」という。）では、これをさらに充実、発展させるため、平成27年度から、文部科学省「我が国の伝統や文化に関する教育の充実に係る調査研究」事業を委託され、本学や本学附属桃山小学校・附属桃山中学校とともに、伝統音楽の伝承者（保存会）や専門家と連携を図りながら、伝統音楽を教材とした授業開発を行い、音楽科の教育課程の中に伝統音楽の学びを位置付けて、伝統や文化に関する教育の充実に努めてきた。

平成28年度から、本校の開発した伝統音楽を教材とする授業を広めるために、京都府公立小学校1校及び京都市公立学校1校との連携を図り、伝統音楽の授業実践や教員研修に取り組んできた。これにより、伝統音楽に関連した題材を使った授業に取り組む京都府・京都市の公立学校が増えてきた。また、箏の伝承者と協力し、教員が主体となって伝統音楽の授業に取り組めるような内容のDVD「箏を活用した授業づくりのために～生田流箏～」を開発した。

さらに、平成29年度及び30年度は、伝統音楽教育の普及を目指して、地域の学校教員や教員志望の学生を対象とした伝統音楽教育ワークショップや、研修会を複数回開催した。このワークショップは、伝統音楽の専門家等による体験と、それらを教材化した授業の模擬授業との構成で提案するものであった。また、和楽器が校内に十分に整備されていない学校でも取り組めるように、和楽器を使わない授業も開発し、教育実践研究発表会で提案した。

学校教育における伝統や文化に関する教育への教員の理解と必要性の高まりと共に、実践を試みようとする教員は増えてきている。しかし、指導する際、教員自身が、箏や和太鼓などの経験や伝統音楽に関する知識がなく、その実践をためらってしまう現状が見られる。例えば箏の授業をしようと思っても、楽器をどの

ように調弦し、配置するのか、爪はどのようにはめるのかといった基本的なことが分からないという声を聞く。

本研究では、平成 28 年度に開発した指導者のための箏の DVD の普及に努めてきたこともあり、実践をするに当たり事前に教材研究として活用したり、あるいは研究会の資料として活用したりという報告があった。本校の授業においても、箏の DVD を活用し、児童の必要に応じて内容を選びながら活用する良さを感じている。箏が学校にはない場合にも、また教員が箏の演奏経験がない場合でも、DVD のような動画コンテンツがあることで、伝統音楽の実践につながっている現状が明らかになってきた。もちろん、動画サイトなどに公開されている伝統音楽の動画等の活用は考えられるが、それらは教育用に作成・公開されたものではないため、教師の教材研究にはなっても、授業においてはなかなか活用できない場合もある。また、児童・生徒にとって必要な情報が手に入らないという声も多く聞く。このように、教員が授業や研修に活用できるような伝統音楽に関するデジタルコンテンツや教材資料の開発、そしてその普及が求められている。

3. 実施内容

(1) 計画の概要

本年度は、「子供の創造性を育む伝統・文化教育—誰もが取り組める伝統音楽の授業実践の充実を目指して—」と研究テーマを定め、誰もが取り組める伝統音楽の授業実践の充実を目指して研究に取り組んできた。伝統音楽の専門家と協働しながら、本校がこれまで開発してきた伝統音楽教育プログラムに基づく教材やデジタルコンテンツを作成した。そして、それらのコンテンツを京都教育大学公式 YouTube kyokyochannel に掲載し、その実践事例をプログラム案として京都府・市の公立小学校・中学校に配布して、教師が授業や研修などで活用できるようにした。

実践校においては、伝統音楽の系統性に注目し、よりよい授業実践を目指した。この中で、和楽器等を使用しない授業実践についてもさらに開発を進めた。さらに、京都府の公立小学校と連携し、協力校の実態に応じて伝統音楽の授業実践を行い、公立小学校への普及を目指した。

(2) 具体的な実施内容

本研究では、本校と本学の音楽科や教職キャリア高度化センターの大学教員や、本学附属桃山中学校教員が協働して、本校がこれまで開発してきた伝統音楽教育プログラムに基づくデジタルコンテンツを作成し、教師が授業や研修などで活用できるようにしたり、伝統音楽の系統性について注目しながら授業開発を行ったりした。

第一に、伝統音楽の専門家と協働して、教員が授業で使いやすいデジタルコンテンツや音源データを計 50 コンテンツ作成した。

第二、伝統音楽の系統性に着目し、伝統音楽の学習内容について整理を行った。小学校・中学校の連携を意識した伝統音楽のカリキュラム作成を目指して、本年度は《越天楽》を教材として小学校 6 年生と中学校 2 年生で研究授業を行い、子供の学びのつながりについて整理した。特に小学校 6 年生の実践では、「音楽文化と授業の関わり」に着目して授業デザインを考えた。《越天楽》の歴史的背景

を鑑み、舞楽として舞われた背景を授業にも反映し、「舞う」という行為を鑑賞の授業に取り入れた。そのことによって、子供たちは、《越天楽》の神聖性や空間的な広さを感じさせるような速度感を感じ取っていた。それは、均等に拍を打つ音楽とは違った拍の流れを、舞うことによって実感したからである。昨年度の実践では、子供たちが音楽から感じたように「舞う」という行為を取り入れたが、本年度はより「音楽文化」について、文化的な背景に基づき舞楽の足取りを取り入れさせることで、授業に関わらせたのである。また、和楽器がない等、伝統音楽教育の環境が揃わない学校でも実践できるように、特に鑑賞領域の授業やわらべうたを活用した授業を充実させた。

第三、京都府の公立小学校と連携し、協力校の実態に応じて伝統音楽の授業実践を行い、その普及を目指した。11月に開催された京都府小学校教育研究会音楽科教育研究大会（於：京都府城陽市立久世小学校）では、第1学年と第2学年で伝統音楽を教材とした授業を提案し、伝統音楽の授業について意見を交流することができた。さらに、教員を対象としたワークショップを行い、授業実践の充実を目指した。

（3）成果の検証

①伝統・文化教育推進委員会で授業を提案することで、学校教育の観点から、また伝統音楽の専門的な見地から意見を交流することができた。例えば、音楽の教科書2社ともに掲載されている《春の海》について研究授業を通して、学校関係者からはこれまでの授業実践と比較しながら、また伝統音楽の専門家からは演奏家としての視点から、様々な意見を交流することができた。特に本実践は、「音楽文化と授業の関わり」に着目して授業デザインを考えた。《春の海》の文化的背景を、授業に関わらせることで、子供たちの鑑賞の視点にどのように影響を与えるのかを試みた。日本学校音楽教育実践学会で提案された研究実践から得た知見をもとに、文化的な背景について段階を追いながら子供たちに与えていくことにより、子供たちが作曲者の叙述を意識しながら鑑賞していく姿が明らかになった。一方で、これまでの研究実践での文化的な背景とは、楽曲に関わる時代的背景や作曲者の心情などを情報として与えるものが多かったが、協議を通して、《春の海》の文化的価値とは、それらの背景だけにとどまらず、演奏者の演奏の技法にも含まれるということ、西洋音楽と比較した際の音の多様性という質的な違いを改めて確認し、教材的価値を一層高めることができた。

②わらべうた、箏、世界の音楽に関するワークショップを行った。参加者のアンケートから、研修の「分かりやすさ」や「満足度」が高かった。「実際に自分が経験することで、より理解を深めることができた。」「遊びや模擬授業で体験したことと、理論の両面があり分かりやすかった。」など自身の学びを深められたこと、そして「子供たちの授業に、今後活用できる内容だった。」と言った感想が寄せられ、ニーズに応じた内容であったことが満足度の高さへとつながったと考える。さらにワークショップの参加者から、実際の授業実践へつながっていったとの報告を受けている。

③これまで開発してきた伝統音楽を教材とした授業プログラム案を基にしてデジ

タルコンテンツを作成し、京都教育大学公式 YouTube に公開した。これらに対応した実践事例集を全国の国立大学法人の附属小学校や京都府・市の公立小学校・中学校に配布することで、より広く多くの教員に活用されることが期待される。

(4) 実施スケジュール

7月	第1学年「拍を意識して《おちゃらかほい》を歌おう」
7月30日	第1回 伝統・文化教育推進委員会（経費は自己負担）
8月17日-18日	日本学校音楽教育実践学会に参加 「音楽文化と授業の関わり」「伝統音楽」に関する授業実践の情報収集
8月22日	城陽市立久世小学校校内研究会助言（於：京都府城陽市立久世小学校）
9月	第1学年「音色を意識して《こんこんちきちん》を歌おう」
10月3日	城陽市立久世小学校研究授業助言（於：京都府城陽市立久世小学校）
10月9日	第2回 伝統・文化教育推進委員会
研究授業	第1学年「はねるリズムを意識して《まるたけえびす》を歌おう」
10月15日	城陽市立久世小学校研究授業助言（於：京都府城陽市立久世小学校）
10月24日	ワークショップ①「わらべうたの音楽の授業」
11月14日	ワークショップ②「箏の音楽の授業」
11月	第6学年「雅楽の音色を意識して《越天楽》を味わおう」 中学校第2学年「テクスチュアを意識して《越天楽》を味わおう」
11月6日	城陽市立久世小学校研究授業助言（於：京都府城陽市立久世小学校）
11月21日	京都府小学校教育研究会 音楽科教育研究大会において伝統音楽の授業を公開（於：京都府城陽市立久世小学校） 第1学年《おちゃらかほい》 第2学年和太鼓のリズムパターンを生かした音楽づくりの活動
12月	第1学年「拍の伸び縮みを意識して《ものうりうた》をつくろう」 （生活科と関連させて行った）
12月12日	ワークショップ③「世界の音楽の授業」
1月	第4学年「旋律を意識して《桃小たんけんうた》をつくろう」
2月12日	第3回 伝統・文化教育推進委員会
研究授業	第6学年「音色を意識して《春の海》を味わおう」
2月	第3学年「変化を意識して《祇園囃子》をつくろう」
2月	デジタルコンテンツを公開
3月	実践事例を掲載した研究報告書を配布

(5) その他実施に当たって特筆すべき事項

--

4. 実施体制

伝統・文化教育研究部会					
校長	香川 貴志	教諭	兒玉 裕司		
副校長	原田 勝之	主幹教諭	桑名 良幸		
教諭（教務主任）	北村 慎朗	教諭（研究主任）	高橋 詩穂		
教諭	井上 美鈴	教諭	福永 愛美		
山口 翼	久保 咲和佳	大島 彰央	平岡 信之	中西 和也	
越智 敏洋	若松 俊介	長野 健吉	樋口 万太郎	木村 明憲	
俣野 知里	Jason Davidson	John Sanfo	江川 眞美	二谷 和恵	
波多野 達二	中村 潤	富永 真依子	南 智子	西行 仁美	

5. 今後に向けて

今年度は、箏、わらべうた、和太鼓のデジタルコンテンツを作成した。今後は広くこれらのコンテンツの周知を図るとともに、コンテンツを活用した実践から見えてきた成果と課題をもとに、来年度作成するコンテンツをより良いものにしていきたい。また、これらのコンテンツ全てに対応した実践プログラム集を作成することで、より活用されることが期待される。

さらに、小学校・中学校の連携を意識しながら伝統音楽の系統性を整理することで、児童・生徒の伝統音楽の学びをさらに充実させたい。

来年度は京都で受け継がれてきた「祇園囃子」や「芸能六斎」に関するコンテンツを作成することで、地域に根差した芸能を教材とする授業実践の充実を目指す。なお、今年度もわらべうたに関するデジタルコンテンツを作成したが、来年度はさらに他のわらべうたも取り扱いたいと考えている。